

シェイクスピアの『ソネット集』

—— 彼の造語とイマジネーションについて ——

英米文学教室 岡 村 俊 明

I

OED (*The Oxford English Dictionary*) に新語あるいは意味の最初の用例が記録されている場合、現代の作家は勿論、多少事情が異なるにせよ、エリザベス朝の作家にとっても、名誉なことであるに違いない。新語を造ったり、新しい語義をつけ加えることは、常に言葉に新鮮な興味を持ち続けている作家にとっては、最大の課題の一つであろう。

文学は言葉から成り立つ芸術であり、言葉に大きな関心が払われるが、その関心の大きな部分をしめるものは、言葉に新鮮な魅力を与えること、言換えれば、陳腐でない表現を使うことであろう。それに新鮮な魅力を与える仕方はいくらかあると思われるが、芸術的、創造的であり、また鮮烈な印象を与える点で、造語および新語義を凌ぐものは多くないかと思われる。

これはわが国においては、新語を作る俳人の関心といくらかの点で似ているかと思う。中村草田男氏は、

万緑の中や吾子の齒生えそむる

の句で、初めて「万緑」という語を用いた。生長するわが子の押えがたい生命力の背景を万緑ととらえた点において、見渡すかぎり緑のみという背景とともに、強烈な父性愛の感ぜられる句である。これが新語であるだけに一層父親の熱っぽい感動が強烈で新鮮である。これは王安石の「万緑叢中紅一点」からとった語であるが、わが国では彼が初めて使った。そしてこれは最近では新緑という語より多く使われているとのことである。¹この一語によって「万緑」が定着し、その句が永く生き残りかつ俳人中村草田男の名声が定着する一因となっていると思う。

エリザベス朝の作家殊にシェイクスピアは今日の作家と比べて新語および新語義を多く作った。それは「地味肥沃な英語の荒野²」という新語を作るによい時代的背景も有利に作用していると思うが、シェイクスピアに造語が多いのはそれだけの理由ではないと思われる。

ここではそういう重大な意味を持つ新語（新語義を含めて）を William Shakespeare の *The Sonnets* (1609年出版) に関して詳述し、それを作る基盤となったシェイクスピアのイマジネーションについて考察したい。

first record を品詞の転換による新語、接頭辞あるいは接尾辞附加による新語、新合成語、語義の拡大およびその他に分類してみた。まず品詞の転換について。

名詞を動詞に転換した例は次のものである。“gluttoning on all”(すべてのものを貪り食う、

75番)の *glutton* (大食漢) は名詞 (まれに形容詞) の用例は多く見られるが、動詞はここが初めての記録である。“How have mine eyes out of their spheres been fitted”(私の目はその円座より飛び出してしまったことだろうか、110番)の *fit* は名詞ではなく、動詞として初めて使われた。ここでは単なる病気の発作ではなく、発作を起こし飛び出すという運動の意味も加えられている。なおかつ目が眼窩より飛び出すという平板な意でなく、病気の発作を受けるように、突然にかつ狂気じみて、目が躍り出すさまが鮮明に読みとれるようである。

動詞から名詞に転換された例は次のものである。“These *blenches* gave my heart another youth”(この流し目が私の心に第二の青春を与えた、110番)。脇目をする意の動詞 *blench* は1400年に使われた例があるが、名詞としては、これが最初の用例である。次に同じソネット110番に “And worse *essays* proved thee my best of love”(劣悪な人と交際してみると、あなたが最上の愛人であることがわかった。)がある。*essay* で試みるという動詞の用例は古くからあるが、この意の名詞はシェイクスピアの造語になる。*essays* を修飾する形容詞 *worse* は実質的には *essays* の目的語であるから、多少動詞の性格を保持しているようだ。“Or say with princes if it shall go well By oft *predict* thet I in heaven find.”(天によく現われる前兆によって、天下太平に関して王侯のような調子で言う、14番) — ここでの *predict* は名詞であり *prediction* (前兆) の意を持っている。

次に形容詞より動詞への転換の例 — “Which *happies* those that pay the willing loan”(喜んで借金を返す人たちを幸福にする、6番) — *happy* は動詞としては最初に使われている。

動詞を形容詞に使った例をあげると、“Then can I grieve at grievances *foregone*”(それに過去の悲しみも悲しめる、30番)、動詞 *forego* は *OED* によると900年から使われているが、その過去分詞が形容詞として使われた最初の例であり、現在では *foregone* が形容詞としても定着している。“Lest my *bewailed* guilt should do thee shame”(私の嘆かわしい罪があなたを辱かしめると困るので、36番)、*bewailed* の前に所有代名詞が附加されているので、これは完全に形容詞として使われている。

名詞が形容詞に転換された例は、“Like as the waves make towards the *pebbled* shore”(波が小石の浜へ寄せるように、60番)である。名詞 *pebble* ではシェイクスピア以前に沢山の用例が見られるが、それを動詞は勿論形容詞として使われた例はなかった。形容詞が名詞として使われた例は “With my *extern* the outward honouring”(私の表情を動作に示して相手の威容を称讃する、125番)の *extern* である。名詞として使われた *extern* は *OED* によるとこれが唯一の例である。

以上のように『ソネット集』では品詞が自由に転換されている。エリザベス朝の作家は今日に比べると比較的簡単に品詞を転換していたようであるが、³ 以上のような柔軟性はシェイクスピアに特色的なものであろう。

接頭辞あるいは接尾辞を附加して新語を作った例は次の通りである。“*unbless* some mother”(妻となり母となるべき人の幸を奪う、3番)、“[Those hours] Will that *unfair* which fairly doth excel”(この年月は優れて美しいものを醜くするだろう、5番。動詞としての *unfair* は *OED* では唯一の例である。)、*featureless* (醜い、11番)、“many maiden gardens yet *unset*”(まだ植えられていない多くの処女園、16番)、“By chance, or nature’s changing course *untrimmed*”(偶然あるいは自然の推移によって美を奪われて、18番)がある。“That

did my ripe thoughts in my brain *inhearse*”(私の成熟した詩想を脳髄の中に納棺した、86番)の*inhearse*ではhearse(棺台、名詞)に接頭辞in-がつけられて動詞に使われている。これは比喩的な使い方でもある。“thou age *unbred*”(まだ生まれていない人々よ、114番)の*unbred*はシェイクスピアの造語であり、今日では廃語になっている。

次にシェイクスピアの作り出した新しい合成語を例示しよう。“*self-substantial fuel*”(自給自足の薪、1番)、“*proud-pied April*”(素適な色彩の4月、98番)、“*this ill-wresting world*”(この悪しざまに解釈しようとする世界、140番)がそれである。

次は新語義について。“And summer's green all *girded* up in sheaves”(夏の緑がごとごとく束ねられて、12番)、*gird*は帯などで腰を巻く意であるが、ここでは比喩的に使われた最初の例である。“*stretched metre of an antique song*”(古い歌の無理に飾り立てた言葉、17番)での*stretched*は手足などの伸びきった意味をもっているが、ここでは言葉を限界以上に飾り立てた意味で初めて使われている。次の“*I sigh the lack of many a thing I sought*”(私が求めた多くのものもなくなったことを悲しむ、30番)の*sigh*は「溜息をついて言う」ではなく、「溜息をついて悲しむ」の意をもっている、即ち語義が拡大して使われている。“*To side this title is impanelled A quest of thought*”(この主張を裁くために思想という陪審員が選ばれた、46番)の*side*は片身に切る、支持する意というより、(ある主張を)どちらか一方に決する意で使われている。*side*の語義が拡大されたのである。“*Beggard of blood to blush through lively veins*”(生々とした血管を流れる赤い血潮がない、67番)の*beggard*は単なる欠乏している、貧乏であるという意ではなく、比喩的な意で使われた最初の用例である。“*strained touches*”(誇張した筆法、82番)の*strained*は言葉について使われた最初の例である。“*Thou truly fair, wert truly sympathized, In true plain words, by thy true-telling friend*”(あなたの真の美しさは、真実だけを語るあなたの友人によって、飾らない真実の言葉で、よく表現された、82番)の*sympathize*は、同情する意の自動詞でなく、(美しいあなたに、美しい言葉を)対応させて表現する意の他動詞である。“*Philomel in summer's front doth sing*”(ナイチンゲールは夏の初めに歌う、102番)の*front*は普通は物の位置を示すが、ここでは時間に関して用いられている。“*in the chronicle of wasted time*”(過ぎ去った時代の年代記のなかに、106番)の*wasted*も時間について使われている。“*made myself a motley to the view*”(私自身を公開の席で技を演ずる道化役とした、110番)の*motley*は雑色の服ではなく、それを着る道化役の意味である。“*Mine eye well knows what with his gust is 'greeing.*”(私の目は好みに合致するものをよく知っている、114番)の*gust*は賞味する意で使われていずに、個々人の好み、意向の意味で使われている。“*I have frequent been with unknown minds*”(私は取るに足らない人とも親しくしていた、117番)の*frequent*は度々起る、常習的なではなく、ある人と親しいという意味である。その意義の拡大していった心理の軌跡はわかるような気がする。“*It suffers not in smiling pomp*”(それはほほえむ栄華にあっても悪い影響を受けない、124番)。“*All my vows are oaths but to misuse thee*”(私の誓いはみんなあなたを誤まり伝えた誓いなのだ、152番)の*misuse*は(語句を)誤用する意を比喩的に拡大して、(ある人について)虚偽を言う意として使われている。

その他の項目に次のような新語がある。“*this huge rondure*”(この巨大な円、21番)、“*When sparkling stars *twire* not thou gild'st the even*”(きら星が顔を出さない夜もあなたは黄

金色にそめる, 28番。twire をシェイクスピアが初めて使った), “region cloud”(空に浮く雲, 33番 — region は初めて限定詞として使われた), “we two must be twain”(わたしたち二人は別れ別れにならなければならない, 36番。述語として最初の例), “in our lives a separable spite”(わたしたちの生活にわたしたちを引離すような悪意がある, 36番) — の separable は引き離されると受動の意で使われたのではなく, 引き離すことが可能と能動の意で使われた唯一の例である。“but effectually is out”(しかし実際は見えない, 113番) の effectually は効果的にという意ではない。“this madding fever”(狂気にするような熱病, 119番) の madding は狂気になるという受動の意ではなく, 能動の意である。

次に上記に引用したシェイクスピアの手になる造語(新語義も含めて)はすべて定着して現在に至るかという点必ずしもそうではない。OED に唯一の用例しかあげられていない単語, あるいは廃語, 又はごく稀にしか使われていないものは次の通りである。品詞の転換による新語(10のうち6) — predict, bewailed, glutton, blench, fit, extern。接頭辞あるいは接尾辞による新語(7のうち4) — unfair, featureless, unset, unbred。合成語による新語(すべて) — self-substantial, proud-pied, ill-wrestng。新語義(14のうち6) — gird, side, sympathize, gust, frequent, misuse。その他(7のうち2) — separable, effectually。

実に41の新語のうち, 21個が廃語に等しい運命をもっている。そのうちで特に品詞の転換, 接頭辞あるいは接尾辞附加の新語, 新合成語は唯一の用例しかあげられていない場合が多い。それは語義の拡大による単語と比べると, 著しい対照をなしているように思われる。この範疇では, 唯一の用例の単語は side と misuse のみであり, 廃語になっている単語も4個から9個の例が引用されており, 同時代人および後世に与えた影響は大きく, 歴史的使命は十二分に果たしたといつてよい。この範疇の用例について考えると, これらはほぼすべて比喩的に使われていることがわかる。例えば “And summer’s green all girded up in sheaves” の gird は帯などで腰を巻くように(省略されているが, 喩義)夏の緑が束ねられる(本義)意である。帯と腰(それぞれ喩義)が藁と麦(それぞれ本義)に転換している。gird を使った場合, 腰を帯で縛ることから連想されるイメージが, 秋の収穫物にも遠曳し, 機械的な bind と違って, 詩的想像の幅は大きくなる。また喩義を省略し, girded で喩義を連想させているが, これは簡潔で凝縮した表現であるといえる。そして例えば乙女の腰を帯で巻くというようななまめかしい風情を喚起するが, それは移ろいやすいゆえに一層美しく感ぜられる乙女を連想させる。比喩的語の底にこういういくつかの具体性があるが, それは転義によっても消失していないわけである。

これらは OED によると初出であるが, そうでない場合でも, 美しく詩的な表現が『ソネット集』には多い。dead metaphor や月並な比喩ではなくて, 斬新で詩的な比喩を考究してみたい。そうすることが, シェイクスピアの造語(新語義も含めて)の秘密を解く手掛りを与えてくれるかも知れない。

II

Caroline Spurgeon はその著 *Shakespeare’s Imagery* (Cambridge, 1965) でシェイクスピア及びエリザベス朝作家のイメージを次の8つの項目に分類している。即ち Nature, Animals,

Domestic, Body, Daily Life, Learning, Arts, Imaginativeである。この分類を『ソネット集』の比喩的単語に援用してみると、⁴前5者は多く見られたが、詩的な語に限定すると、Learning, Artsは多くないようである。最後のImaginativeはその項目に属する語を更に分類すると、その他の項目のイメージにはいる。従って Learning, Arts, Imaginative の比喩はここでは割愛した。前5者に属するものはそれぞれ5個引用する。

まず Nature について考察しよう(日本語訳はイタリック体を中心にして、他は省略することもある。) “when his youthful morn Hath travelled on to age’s *steepy* night”(老年の険しい暗夜, 63番), “In me thou see’st the *twilight* of such day”(私の中に薄明を見るだろう, 73番), “Your *shallowest* help will hold me up afloat”(ごく浅い援助でも私を浮かばせるだろう, 80番), “My self bring *water* for my stain”(私自身が汚名を清める水を持ってくる, 109番), “you *o’er-green* my bad”(私の欠点を緑の芝でおおい隠す, 112番) である。

Animalsの範疇としては, “though *mounted* on the wind”(私は風に乗るといへども, 51番), “In *winged* speed no motion shall I know”(鳥翼の速さのなかにも, 51番), “a modern *quill*”(現代の驚ペン(文人), 83番), “The teeming autumn *big* with rich *increase*”(立派な子孫(実)を孕んだみのりの秋, 97番), “[I] … *Gored* my own thoughts”(猪などの角で)私の考えを傷つけた, 110番)。

Domesticなものとしては, “and hath stell’d Thy beauty’s form in *table* of my heart”(私の心の画板にあなたの美の形を描いた, 24番), “their *masked* buds”(その仮面の蕾, 54番), “The rich-proud cost of *outworn* buried age”(着物がすりきれるように、栄華を極めた貴重な品が)老朽し, 64番), “Others, but *stewards* of their excellence”(自分の美を主人からの預かり物のように、他人へ伝える執事にすぎない, 94番), “The humble *salve* which wounded bosoms fits”(傷ついた心によく効く謙遜という名の軟膏, 120番) である。

Bodyに属するものは, “all full with *feasting* on your sight And by and by clean *starved* for a look”(あなたの姿をほしひまゝに見て満足するが、すぐにあなたに会えないで飢える(切望する), 75番), “my eye so *barren* of new pride”(目新しい美しさに欠ける, 76番), “Of *mouthed* graves”(口を開いて亡者を待つ墓, 77番), “have I *slept* in your report”(あなたを讚美することを怠ってきた, 83番), “I will acquaintance *strangle* and look strange”(交友を打ち切る, 89番) である。

Daily Lifeに属するものは, “And puts apparel on my *tattered* loving”(ぼろ切れのよいうな愛, 26番), “his *imprisoned* pride”(人目に触れさせない美しい衣装, 52番), “*captive* good attending *captain* ill”(従者の善が首領の悪に仕える, 66番), “these *bastard* sign of fair”(私生児美の徽章, うわべのみの美の姿, 68番), “Bring me with the *level* of your frown”(銃の照準のように)あなたの不興顔の正面に私を据えて下さい, 117番) である。

以上述べてきたことから言えることは、自然界の生物、そこに見られる多くの現象又は出来事;あるいは馬や猪や鳥などの棲息する動物界;机や着物、病氣、貴族に仕える執事などの家庭生活に関するもの;山海の珍味に満足しあるいは飢えている状況、または女性の不妊や人々の睡眠などの肉体に関する表現;牢獄や戦争または人々の氏素姓を示す日常生活に関するイメージが見られることである。例としてはあげなかったが、草木、季節、太陽、巡礼、墓、船、投錨など5つの項目にまたがる、またその中でもさらに分布の広い多くの詩的比喩的語が見られる。他に詩的表現には特

に見るべきものはなかったが、法律、学問、芸術などの比喩もある。事物（省略はされているがある物とある物が結びついて比喩となる）の分布が広いこと、事物が異なっているにもかかわらずその相似た性質を通じてじつに自然に結びつけられていることがわかるであろう。

次にいくつかの例を取出し検討を加えよう。63番の“age's steepy night”のsteepyであるが、(坂が) 険しい意で使われるのが普通である。ここでは急激に襲ってくる老衰と秋の日の釣瓶落しに暮れる状況を表わしている。51番の“mounted on the wind”のmountedは馬に乗る意であるが、それが比喩的になり、抽象名詞「風」に乗る、風のようにはやく駆ける意になっている。54番の“their masked buds”は蕾のバラのことであるが、美女が舞踏会で仮面をかぶるように、バラが仮面をかぶっている。89番の“I will acquaintance strangle”の大意は「交友を打ち切る」である。strangleは首をしめて殺す等の意をもっているが、ここでは抽象名詞「知己」をくびり殺す意で使われている。26番の“And puts apparel on my tattered loving”のtatteredはぼろぼろの着物に使われるのが普通であるが、ここでは比喩的に「愛」に使われている。

これらはgirdについて既述したと同じく、喩義が本義に遙曳し、鮮明で絵画的で、詩的幅が大きくなっている。このように自由闊達に次から次へと比喩的表現が作られているが、これは普通の人間とは違ったそれを作り出す特別な基盤があるのではないかと思われる。

“mounted on the wind”を例にとってみると、シェイクスピアのイマジネーションにとっては、馬に乗ることも風に乗ることも大きな違いがなかったのではないだろうか。“I will acquaintance strangle”では、人間の首をしめることと、抽象名詞の首をしめることは、大きな差異がなかったと思われる。蕾のバラも仮面の美女も、険しい坂も釣瓶落しの夜などについても同様なことがいえる。シェイクスピアは本質的には、動物、植物、鉱物および抽象的なものに対して、われわれが持っている区分は設けず森羅万象をほぼ単一の次元に並べ、生命のないものにも生命を与えた。彼の頭脳はけたはずれて柔軟であったと思われる。これは常時比喩が生まれる基盤の1つといえよう。

次に物事にたいするシェイクスピアの把握について考えてみたい。J. Middleton Murryはその著*The Problem of Style* (Oxford, 1973) で、シェイクスピアはあるイメージを種々の角度から取り上げているとして、シェイクスピアの劇および詩から次のような例をあげている。⁵

Your praises are too large:but that your youth,
And the true blood which fairly peeps through it,
Do plainly give you out an unstained shepherd...

The Winter's Tale IV. iv. 147

He tells her something
That makes her blood look out. Good sooth, she is
The queen of curds and cream.

The Winter's Tale IV. iv. 159

And tonight I'll force

The wine peep through their scars.

Antony and Cleopatra III. xiii. 191

Flora peering in April's front.

The Winter's Tale IV. iv. 2

Who o'er the white sheet papers[sic] her whiter chin,

The Rape of Lucrece 472

did raise his chin

Like a dive-dapper peering through a wave,

Who, being look'd on, ducks as quickly in.

Venus and Adonis 85

これらはみなある物からある物が顔を覗かせる、というイメージである。赤面する（羞らいの血がその美しい顔を覗かせる）や傷口から酒がふき出す（酒が顔を覗き出す）や、花の女神フローラが4月の初めに顔を覗かせる、白い敷布からさらに白い顎を覗かせる、波間からかいつぶりが浮ぶように（顔を覗かせる）、顎をあげる表現がそれである。マリーのあげた例が示すように、単一のイメージであるが、シェイクスピアはそれを幅広く立体的に捕えていることがわかる。

『ソネット集』ではいかに多岐にわたって捕えられているか、その例を「死」と「窓」のイメージについて考察してみよう。最初は「死」。“Gusts of winter's day and barren rage of death's eternal cold”(永遠に冷めたいものとしての死, 13番), “For precious friends hid in death's dateless night”(永遠の夜としての死, 30番), “Sweet roses do not so; Of their sweet deaths are sweetest odours made”(甘美な香りを残す死, 54番), “Tired with all these, for restful death I cry”(安息にみちた死, 66番), “From hence your memory death cannot take”(万物を分つわけではない死), “So shalt thou feed on Death, that feeds on men”(人間の食物としての死, 146番), “And Death once dead, there's no more dying then”(生物のように生死をもっている死, 146番)がある。死は多面的に把握されていることがわかる。

次に「窓」について。“So thou through windows of thine age shalt see”(老令という窓 — 子供のこと, 3番), “That hath his windows glazed with thine eyes”(目がガラスとしてはいつているその店の窓, 24番), “Mine eyes have drawn thy shape, and thine for me Are windows to my breast”(あなたの目は私にとって私の胸の窓, 24番)。

以上の例からも明白なように『ソネット集』においても、物事が幅広く多面的に把握されている。では事物が立体的に把握され、その枠が取りはられ、単一の次元に並べられていれば、比喩的表現は自由に作られるのだろうか。その秘密を解く鍵を端的に示しているのが、次のソネットであろう。⁶

For it no form delivers to the heart

Of bird, of flower, or shape which it doth latch,

Of his quick objects hath the mind no part,
 Nor his own vision holds what it doth catch:
 For if it see the rud'st or gentlest sight,
 The most sweet favour or deformed'st creature,
 The mountain, or the sea, the day, or night:
 The crow, or dove, it shapes them to your feature.
 Incapable of more, replete with you,
 My most true mind thus maketh mine untrue. (CXIII)

And that your love taught it this alchemy?
 To make of monsters and things indigest,
 Such cherubins as your sweet self resemble,
 Creating every bad a perfect best
 As fast as objects to his beams assemble: (CXIV)

鳥でも花でも、粗野なものでも優しい景物でも、最も美しいあるいは奇怪な生物でも、山、海、昼あるいは夜でも、目でみたものをその枠組をはずし、貴公子に変えてしまう。あるいは怪物でも形の整わないものでも美しい貴公子に似た天使に変える、物事が彼の目の光の届くところに集まればあらゆる醜悪なものも完全な美に変えてしまう。錬金術にもたとえられる転換あるいは結合の強い作用が見られる。その作用はここでは“your love”貴公子に対する強い愛（強烈な感覚作用）であるといえる。従って比喩というものは、その基盤として事物を多面的、立体的に把握し、なおかつその枠を取り除き、新羅万象を単一の次元に並べていなければいけないことはいうまでもない。また「シェイクスピアは何一つ忘れなかった」と批評家が言っているように、⁷彼は抜群の記憶力の持ち主であった。したがって一度見聞きしたものは決して忘れず、しかもそのストックは巨大なものであったであろう。その状況は少しの刺激があれば異なった事物が、その巨大なストックから容易にかつ生々とその共通する特徴を通じて結び合わされ、比喩的表現が生み出される。そしてその引き金の働きをするのが、強烈な感覚であるということになる。

III

斬新で詩的比喩（first recordでないもの）およびそれを作る基盤となっているシェイクスピアのイマジネーションについて考察してきた。この基盤は彼の造語にも適用されるであろうか。

まず品詞の転換について。「小石」という静的な名詞は「小石で敷詰められた」という広がりのある形容詞“pebbled shore”とされ、名詞「大食漢」は「大食漢のように貪り食う」“gluttoning”と名詞の属性が動的に、かつ広く把握されており、名詞「病気の発作」“fit”は病気の発作を受けるように突然かつ狂気じみて目が躍り出す、と変えられてゆく。これらは事物を立体的に把握し、かつその枠組をはずし、また無生物をも生きているものとして考えることから生み出されると思われる。しかし“blench”, “predict”, “extern”はこれだけでは説明できないようである。接頭辞（接尾辞）附加の場合はどうであろうか。inhearseはhearse（名詞、棺台）にin-を附加し、比喩

的に動詞として使われている。hearseから想像されるものが、in-と結合されたことにより、幅広く連想される。しかし他の語 (unbless, featureless等) は二者が結合され、その概念が大きくなり、新語となったとはいえるが、既述の基盤が適用されるかどうかは、『ソネット集』の用例だけでは判断に苦しむ。また新合成語の場合にも、この基盤を適用することは索強付会の弊をまぬがれないだろう。

他の造語 (語義の拡による) の場合はどうであろうか。その基盤はそっくりそのままあてはまるといえる。詩的、比喩的単語も語義の拡大による新語も、それを作り出すシェイクスピアのイマジネーションは同じであるといえる、いや新語であるだけに、その基盤はもっと強固に存在する、創造にさいしてはその要素が強烈に作用しているといえる。そして新語義による新語はシェイクスピアの造語のなかでも、主流をなしていることは既述した通り事実であろう。

シェイクスピアは同時代の他の作家と比べても、造語および詩語が格段に多い。筆者はこれらは共通する基盤から作り出されたのではないかと推定してきたが、それは『ソネット集』の合成語および接頭辞附加による新語には必ずしも適用されなかったが、品詞の転換による大部分の新語および新語義による新語に適用されることが明らかになったと思われる。

[注]

¹ 『合本俳句歳時記』 (角川書店, 新版, 1974年), p. 438.

² 大塚高信著『シェイクスピア及び聖書の英語』 (研究社, 1951年), p. 8.

³ See E. A. Abbott, *A Shakespearian Grammar* (1869; rpt. Senjo Shobo, 1962), p. 190.

⁴ Spurgeon, *Charts* I, II, III.

⁵ Murry, pp. 103-4.

⁶ 引用したテキストはJ. D. Wilson (ed.), *The New Shakespeare: The Sonnets* (Cambridge University Press, 1966) である。

⁷ Edward A. Armstrong, *Shakespeare's Imagination* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1963), pp. 120-1.

